

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | 在日中国人留学生の怒り経験およびその対処法について |
| Author(s) | 張, 鳳雲; 盧, 濤 |
| Citation | 広島大学マネジメント研究, 21 : 101 - 109 |
| Issue Date | 2020-03-26 |
| DOI | |
| Self DOI | 10.15027/48998 |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048998 |
| Right | Copyright (c) 2020 by Author |
| Relation | |



在日中国人留学生の怒り経験およびその対処法について

Anger Experiences and Coping Methods of Chinese Students in Japan

張 鳳 雲
Fengyun Zhang

盧 濤
Ro To

Abstract

This paper is based on the questionnaire survey of “Angers and Coping Methods of Chinese Students in Japan”. Using SPSS to analyze the correlation between the anger experience and the duration of the stay, it is found that there is a weak negative correlation that the shorter the duration is, the less experience they accumulate. Based on previous researches, on one hand, according to the reasons of anger, the experience is classified into Japanese behavior patterns, prejudice, temporary victimization, public issues, etc. On the other hand, according to the directions of anger, the coping methods are divided into directing to the person (opposite or third party), directing to some objective things and shifting the attention through other activities, etc. Compared with previous studies, we can see that the anger experience and coping methods in intercultural communication are more or less different from those in the communication between the natives.

Keywords: Angers and Coping Methods, weak negative correlation, reasons of anger, directions of anger, public issues

1. はじめに

JASSOの「平成30年度外国人留学生在籍状況調査結果」によると、2018年5月現在中国人留学生の総数は114,950名であり、前年度より7,690名も増え、率にして6.69%上回った¹。

中国人留学生を対象とする従来の異文化コミュニケーション研究は、多岐にわたっている。例えば、異文化適応にあたってのパーソナリティ変化について、SUN (2011)は、在日中国人留学生が損害回避と報償依存、固執、自己志向、自己超越、協調性において有意差が見られ、パーソナリティに変化が生じたと指摘している。譚・今野・渡邊 (2009)によると、自律的留学動機づけ、友人関係への動機づけ、友人関係満足感、対人葛藤解決方略、社会的スキルについて測定した結果、中国人留学生の自己決定性の高い動機づけは対人適応と正の関連、自己決定性の低い動機づけは対人適応と負の関連が示された。謝 (2014)は異文

化ストレスと無気力感と滞在期間とのかかわりに関して、日本語学校における中国人留学生の中で、滞在期間が一年半以上の学生が、滞在期間約三カ月や約一年の学生より「対人関係・コミュニケーション」におけるストレスの得点が有意に高かった。また、滞在期間約半年の学生が滞在期間約一年や一年以上の学生より「勉強・進路・アルバイト」におけるストレスの得点が有意に高いという結果が示されている。

ところが、異文化コミュニケーションに際するホスト国滞在中の留学生の感情 (emotion) のあり様、経験及び表出を検討する研究はほとんど見られないのが現状である。和田 (2010)によると、最近の認知科学などの知見として、人間というのは感情の状態によって思考パターンが変わる

¹ 平成30年度外国人留学生在籍状況調査結果 www.jasso.go.jp 2019.5.21閲覧。

生き物だという。怒りは Ekman が挙げられる、喜び・驚き・怒り・恐れ・嫌悪・悲しみという六つの基本感情の一つであり、留学生の行動スタイルや思考パターンに影響しているものと考えられる。

アンガーマネジメントの分野では、「怒り」の短所として、腹の立つ相手のために時間を費やすのはもったいないこと、メンタル不調・体調不良を引き起こすこと、冷静な判断が出来なくなり、後で後悔してしまうことなどが認められている。異文化コミュニケーションの場合、怒りは、互いの関係を疎遠にしたり、ホスト国への理解を妨げたりして、しいては留学の目標達成にも障害をもたらすこともありうると推測される。加賀美・小松 (2013) によると、大学キャンパスにおける異文化間交流の障壁として、「情報の壁」、「環境的障壁」、「スキルの壁」、「心理的な壁」、「文化的な壁」の五つがあげられる。怒りはまさにその心理的壁でも文化的壁でもあるといえよう。従って、日本人とのコミュニケーションにおける中国人留学生の怒り感情に焦点をあてる研究が必要不可欠である。

本研究は、アンケート調査を行い、日本滞在中の中国人留学生が日本・日本人に対する怒りの経験及びその対処法の一端を明らかにすることを試みる。

2. 在日中国人留学生の怒り経験と対処法に関する調査

まず、本研究における怒りとは何かを明らかにしておく。怒りは、進化論では、侵害に対する警告として喚起される心身の準備状態 (湯川, 2008: 7); 一般心理学では、欲求充足が阻止されたときにその阻害要因に対して生じるもの; 精神医学では、辺縁系から沸き起こるある種の反動的・反射的な感情 (和田, 2010: 18-19) であるというように、分野によって、定義が異なっている。湯川 (2008) の「自己もしくは社会への、不当なもしくは故意による (と認知される)、物理的もしくは心理的な侵害に対する、自己防衛もしくは社会維持のために喚起された、心身の準備状態である」という定義が網羅的で広く認められているようである。今回の質問紙は中国語版で、「怒り」を中国語の“**愤怒**”と同一視し、回答を

求めたものである。被験者の記述から、それは直接的・間接的侵害に対する一時的不満・不平から、腹立ち、憤り、それらを膨らませた恨みまで幅広い範囲のネガティブな気持ちであることが分かった。それに、「穏やかな状態・怒りを感じない」から「人生で最大級の怒り・“絶対に許せない!!”」までの安藤 (2016) が主張している怒りの10段階とほぼ同じような様相を呈している。

筆者は「問巻星」というアプリを使用して、在日中国人留学生を対象に、半構造化アンケート調査を行った。質問紙はフェースシートと2つの自由記述問題からなっている。調査期間は2019.4.29から2019.5.14までである。

175名の被験者の属性を示すと、平均年齢が25.47歳 (SD = 4.71)、そのうち男性69名 (39.43%)、女性106名 (60.57%)、18歳から46歳まで、幅広い幅を呈している。在学状況からみれば、学部生43名 (24.57%)、修士課程61名 (34.86%)、博士課程56名 (32%)、その他15名 (8.57%) であり、専門は文科117名 (66.86%)、理科19名 (10.86%)、工科35名 (20%)、その他4名 (2.29%) となっている。過半数の留学生が奨学金を受給しており、そのうち、中国の奨学金53名 (30.29%)、日本の奨学金33名 (18.86%)、その他2名 (1.14%) である。日本滞在期間は、1年未満60名 (34.29%)、1年～3年67名 (38.29%)、3年以上48名 (27.43%) である。怒りやすい方かどうかの自己判断については、「はい」は22名 (12.57%)、「それほどでもない」は77名 (44%)、「いいえ」は76名 (43.43%) となり、過去一週間日本・日本人に怒りを覚えた回数については、「無」は126名 (72%)、「1回」は28名 (16%)、「2回、2回以上」は21名 (12%) である。怒りコントロールの自己評定については、「低い方」は14名 (8%)、「まあまあ」は80名 (45.71%)、「高い方」は81名 (46.29%) という結果である。

以下、在日中国人留学生の怒り経験とその対処法を具体的にみてみよう。

2.1 在日中国人留学生の怒り経験について

まずは「あなたは日本滞在中、どんな時に日本・日本人に怒りを覚えたか、できるだけ多く箇条書きで自由に記入し、よろしければそれぞれ理由も述べてください」という中国語版の自由記述

問題である。

回答数は延べ231である。そのうち49名(21.21%)が「一度もない」あるいは「今までない」と答えたのは興味深い。したがって、フェースシートに記載された特定項目は怒り経験の有無と何らかのかわりがあるかをSPSSで分析した。その結果

として、無経験に着目すると、表1に示すように、性別は0.044と無相関、年齢は0.055と無相関、奨学金の有無は0.056と無相関、滞日期間は-0.244とやや弱い負の相関関係が認められた。つまり、日本にいる日にちが短いほど、怒りを覚えたことが少ないというわけである。

表1 性別、年齢、奨学金、滞日期間、および怒り経験の相関行列

| | | 性別 | 年齢 | 奨学金の有無 | 滞日期間 | 怒り経験の有無 |
|---------|---------------------|-------|------|--------|---------|---------|
| 怒り経験の有無 | Pearson Correlation | -.044 | .055 | .056 | -.244** | 1 |
| | Sig. (2-tailed) | .565 | .473 | .462 | .001 | |
| | N | 175 | 175 | 175 | 175 | 175 |

** Correlation is significant at the 0.01 level (2-tailed).

残り182の回答をKJ法により、項目の分類、整理を行ってみた。

怒りの経験や表出に関する研究は、Averillの「日常的な怒り経験」が代表的であり、大淵

(1983, 1984)がそれに基づき作られた日本版が日本で広く検討されている。どんな時に怒りを感じるかについての先行研究は表2のとおりである。

表2 怒り経験についての主な先行研究²

| カテゴリー | Averill (1982) | 大淵ら (1986) | 鈴木・佐々木 (1994) | 鈴木 (2002) | 片田 (2015) |
|-------|----------------|------------|---------------|-----------------------------|------------------|
| 外的被害 | 身体的被害 | 身体的被害 | | 被害・強要 | 自分の利益が侵害されたとき |
| 内的被害 | 欲求不満 | 欲求不満 | 自己の要求が通らない | | |
| | プライドの損傷 | プライドの損傷 | 他者からの非難・侮蔑 | 他者からの非難・侮蔑 + 他者からの無視・疎外・孤立化 | 自尊心が傷ついたとき |
| | 道義違反 | 道義違反 | 社会的倫理に反する行為 | 他者の非道徳的行為・無責任的な行動 | |
| | 期待を背く | 期待を背く | | | 「わかりあえなさ」を感じるとき* |
| | | | 他者との意見・価値観の違い | 他者との意見、価値観との違い | |
| | | もともとの対人嫌悪 | | | |
| 自己責任 | | | | 自己の否定的側面・失敗* | |
| 公的問題 | | | | | |

以上の示唆に富んだ知見を踏まえ、最終的に表3のように、偏見、日本人の行動様式、一時的被害、公的問題、その他という五つのカテゴリーにまとめてみた。

² カテゴリーは筆者がまとめたものであるが、公的問題は今回の調査において被験者が言及された項目であり、先行研究では触れていないものである。また、下線のついた*のところは今回観察されなかった。

表3 怒り経験に関する自由記述回答の分類³

| カテゴリー | | 記述内容の例（一部筆者が訳） | 出現回数（割合） | |
|---------------|-------|--|--|------------|
| 日本人の行動様式 (90) | 迷惑行為 | ①公共場所で匂った足を靴の外に出す ②はっきり意見を言い出さない ③仕事が緩慢で、融通が利かない ④裏と表がある ⑤よく夜遅くまでパーティーをする ⑥バイト先でいじめられる | 77 (30.30%) | |
| | マナー違反 | ①行列に割り込む ②電車の中で騒ぐ ③研究室でトランプをして騒ぐ ④よく人の噂話をする | 13 (5.63%) | |
| 偏見 (47) | 差別 | 待遇 | ①中国人という理由で、何もしないのに特別扱いされる ②実習中、旅館の料理長が作ってくれた料理はほかの日本人社員より少ない ③つらい仕事は中国人に先にやらせる ④ゼミで中国人学生にプリントを配らない ⑤郵便局の局員に差別される | 20 (8.66%) |
| | | 蔑視・敵視 | ①故意に中国・中国人を歪曲化する ②中国人を敵視する ③マスコミは中国・中国人への誹謗中傷が日常的である ④日本人は尊大で、独りよがりである | 16 (6.93%) |
| | 理解欠乏 | ①中国へは一度も行ったことがなく、中国に対するイメージが時代遅れである ②普段から上司は「中国人の家は汚いだろう」など失礼な発言をする ③政治の話をするとき、見方が偏っている ④個々人の行為を中国人全体の行動様式とみなす | 9 (3.90%) | |
| | 街宣右翼 | 街宣右翼に出会う | 2 (0.87%) | |
| 一過性被害 (34) | 故意による | ①電車の中で、うっかり人の腕にぶつかったら、汚いと言われた ②バイト先でいじわるなお客さんに怒鳴られた ③歩行中わざと肩をぶつけられた ④窓が老朽化して小さいヒビが入ったことを理由に、賠償してもらうようにストーカー行為を続けている ⑤約束しておいたのに、その後いくら連絡しても返事してくれず、結局ドタキャンされた | 30 (12.99%) | |
| | 過失による | ①言われたとおりに家賃を振り込んだが、大家さんに拒否され、それを返してくれるとき、銀行から振り込み手数料を請求される場所である ②酔っぱらった人のせいで電車が遅れ、旅行のスケジュールが乱れた ③インターネットの回線を契約するときに、たらい回しされて、時間のロスがあった ④眼鏡を作るとき、フレームを3回も調整してもらったのに、なかなか直れなかった | 4 (1.73%) | |
| 公的問題 (7) | | ①また消費税を引き上げる ②NHKの受信料を払う ③敬語がややこしい ④高齢者が大勢いて、電車やバスでは座れない | 7 (3.03%) | |
| その他 (4) | | もともとの嫌悪感+意味不明の表現 | 4 (1.73%) | |
| 無経験 (49) | | | 49 (21.21%) | |
| 合計 | | | 231 (100%) | |

上の具体的な統計結果を示すと図1のとおりになる。

³ 被験者の不正確な日本語に修正を加えた箇所がある。

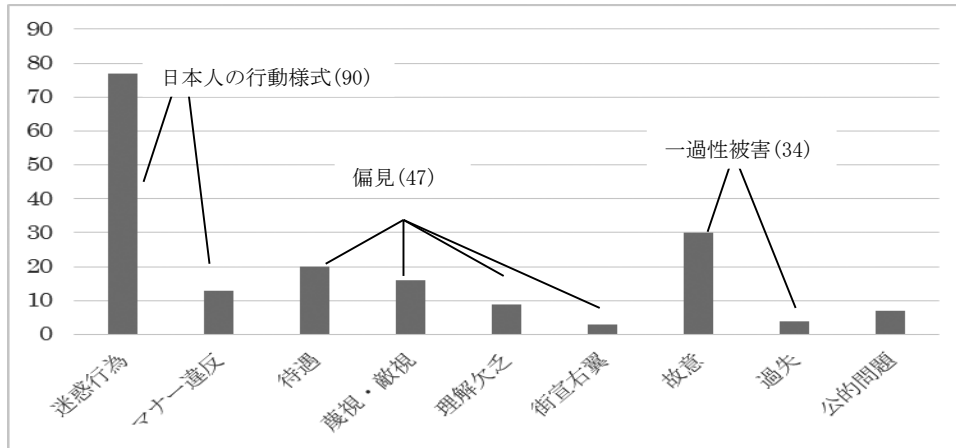


図1 在日中国人留学生の怒り経験についての統計結果

日本人の行動様式に関しては、合計90件(38.96%)である。日本人の性格や日本人の仕事ぶりについての評価、反復して行われる行動、日常に出会った出来事から読み取られた統一性のあるものをここで、一応「日本人の行動様式」というカテゴリーに入れている。具体的には、手続きが面倒くさい、仕事上融通が利かない、酔っぱらったおじさんが怖い、夜間の大騒ぎなどのような迷惑行為、行列に割り込む、陰口を聞く、電車での飲食、うっかり人の個人情報を漏らすなどのようなマナー違反に分けられる。

偏見だと、合計47件(20.35%)に達している。偏見を上位概念に、さらにその内容によって3つのカテゴリーに細分化することができる。そして、表3に示すように、中でも差別は待遇、蔑視、敵視に分かれる。そのうち、待遇については20件もあり、郵便局、デパート、バイト先、ゼミなど日常生活の中でしばしば見られることが本調査で分かった。特に、日本のサービスが世界中で評価されているにもかかわらず、スタッフから差別的に扱われるのを理不尽に思うのは当たり前ではなかろうか。また、蔑視・敵視型差別は16あり、故意に中国・中国人を歪曲化すること、偏見を煽るマスコミの誇大宣伝、日本人が尊大で、独りよがりであることが問題視される。理解欠乏型差別は9件あり、政治や歴史への理解が足りないこと、個々人の誤りを中国人全体の犯しがちな誤りと思い込むこと、「スモッグは中国から吹き込んできたの」という文句、中国人全体のしつけや能力を低く評価することなどが挙げられる、中国・中国人に対する無理解によるものだと考えら

れる。

ほかに、極僅かだが、街宣右翼についての言及も見られる。

一過性被害については、合計34件(14.72%)である。一度しか迷惑・被害を受けたことのない経験が一過性被害であり、盗まれた、ストーカーされた、怒鳴られた、LINEで無視されたという日本人の故意による被害もあれば、契約通りに動いたのに経済的・身体的な被害を受けたという日本人の過失による被害もある。

数少ないながらも(7件, 3.03%), 日本の消費税、水道法、貨幣発行、高齢化及び敬語体系に触れた意見も散見されるが、注目に値する。ホスト国の社会に溶け込んでおり、生活の余裕ができて、社会問題、制度設計にも目を向けるようになったといえよう。

2.2 在日中国人留学生の怒りへの対処法について

我々の質問紙では、「あなたは怒りを覚えたとき、どのように対応するか。できるだけ多く箇条書きで自由に記入し、可能であればその目的を明記してください」と、回答を求めた。KJ法により、収集された項目の分類、整理を行ってみたが、怒り経験のない人の記述を除く回答数は延べ160件である。

Averillが怒りに伴う道具的反応を、直接的攻撃行動群、間接的攻撃行動群、攻撃転嫁行動群、非攻撃行動群に分けて、さらに、11項目の反応を区分したのは示唆的であり、それ以降の研究に大きく影響を与えている。日比野・吉田(2006)によ

表4 怒り経験後に生じた行動に関する主な先行研究（日比野・吉田，2006，p33による）

| | 阿部 (2002) | Averill (1982, 1983) | 日比野ら (2002) | Kassinove et al. (1997) | 木野 (2000, 2003) | 大淵, 小倉 (1984, 1985) | 大淵 (1986, 1987) | 大平 (1989) | Yogo & Onoue (1998) | 湯川・日比野 (2003) |
|--------------------|--|------------------------------|----------------------------|--------------------------------|-----------------------|------------------------------|------------------------------|------------------------------|---------------------|----------------------------|
| Anger-Out 直接的攻撃 | 身体的攻撃 言語的攻撃 | 身体的攻撃 言語的攻撃 利益停止 | 攻撃行動 | 攻撃行動 言語的攻撃 嫌み | 感情的攻撃 無視 嫌み | 身体的攻撃 言語的攻撃 利益停止 | 身体的攻撃 言語的攻撃 利益停止 | 身体的攻撃 言語的攻撃 利益停止 | | 攻撃行動 |
| 間接的攻撃 | 告げ口 相手の大事な なものへの 攻撃 | 告げ口 相手の大事な なものへの 攻撃 | 社会的共有 | | | 告げ口 相手の大事な なものへの 攻撃 | 告げ口 相手の大事な なものへの 攻撃 | 告げ口 相手の大事な なものへの 攻撃 | 社会的共有 | 社会的共有 |
| 攻撃転嫁 | 人に八つ当 たり 物に八つ当 たり | 人に八つ当 たり 物に八つ当 たり | 物への転嫁 | 物への転 嫁 | | 人に八つ当 たり 物に八つ当 たり | 人に八つ当 たり 物に八つ当 たり | 人に八つ当 たり 物に八つ当 たり | | 物への転嫁 |
| その他 | 敵意な表情・しぐさ 他の罰 | | 言語的伝達 社会的共有 | 愚痴 | 表情・口調 遠回し 理性的説得 | | | | 社会的共有 | 社会的共有 |
| Anger-In | 反対の表現 | 反対の表現 | 逃避・回避 | 逃避・回避 いつもどおり 恨みを抱く | いつもどおり | 反対の表現 | 反対の表現 | 反対の表現 | | |
| Anger-Control | 冷静な話し 合い 心を鎮める 相談 説明を求め る | 冷静な話し 合い 心を鎮める 相談 | 原因究明 社会的共有 合理化 忘却 | 心を鎮める 問題解決 ポジティブ に考える | | 冷静な話し 合い 心を鎮める 相談 | 冷静な話し 合い 心を鎮める 相談 | 冷静な話し 合い 心を鎮める 相談 | 社会的共有 | 原因究明 社会的共有 合理化 忘却 |

*社会的共有に関しては、告げ口・愚痴・相談など、第三者に対して行う言語的な行動をすべて含むものと考えられる。

それまでの主な先行研究をまとめた表4からも分かる。Anger-Out, Anger-In, Anger-Controlをまとめてみると、25の項目を数えることができる。即ち、身体的攻撃、言語的攻撃、社会的共有、相手の大事ななものへの攻撃、人に八つ当たり、物に八つ当たり、敵意な表情・しぐさ、利益停止、嫌み、無視、遠回し、理性的説得という12項目のOutシリーズと、反対の表現、逃避・回避、いつもどおり、恨みを抱くという4項目のInシリーズと、冷静な話し合い、心を鎮める、相談、説明を求める、問題解決、ポジティブに考える、原因究明、合理化、忘却という9項目の

Controlシリーズである。

しかし、本調査の結果から見れば、Averill (1982, 1983) の「身体的攻撃」「相手の大事ななものへの攻撃」「人に八つ当たり」、Kassinove et al. (1997) の「嫌味」、木野 (2002, 2003) の「嫌味」と「遠回し」、日比野ら (2004)、湯川ら (2003) の「忘却」「合理化」が見られない上に、「原諒（許し）」と「腹誹（心の中の否定）」という新しい対処法が見られたのが興味深い。以上の表を参考に、怒りの指向対象によって、表5のように対処法を5つのカテゴリーにまとめてみた。具体的な統計結果は図2のとおりである。

表5 怒りへの対処に関する自由記述回答の分類

| カテゴリー | 記述内容の例（筆者訳） | 出現回数（割合） |
|-------|---|-------------|
| 相手指向型 | 非言語的対処 ①テーブルを叩く ②作り笑いをする ③顔をこわばらせ、相手にしない ④黙ったままその場を去る ⑤無視する場合が多い ⑥相手を許す | 43 (26.88%) |
| | 言語的対処 ①冷静に理由を聞く ②事実を並べて説得する ③はっきり原因を述べて理解してもらう ④ののしる ⑤突っ込む | 38 (23.75%) |

| カテゴリー | 記述内容の例（筆者訳） | 出現回数（割合） |
|--------|--|-------------|
| 自己指向型 | ①怒りを胸にため込む ②自ら怒りをコントロールする ③我慢する ④何もしない | 44 (27.5%) |
| 第三者指向型 | ①その場か後日友達に突っ込む ②110番に通報する ③ SNS に書きこむ | 22 (13.75%) |
| 物事指向型 | ①注意をそらすために、スマホをいじる ②運動してリラックスする ③ゲームや勉強をする | 6 (3.75%) |
| その他 | 意味不明+対処とは言えない記述 | 6 (3.75%) |
| 合計 | | 160 (100%) |

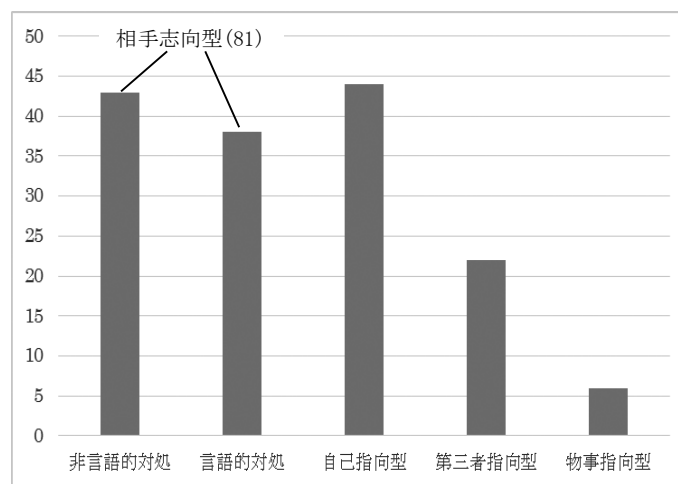


図2 在日中国人留学生の怒りへの対処法についての統計結果

相手志向型は、過半数に達し、合計81件(60.63%)である。怒り対象に直面する場合、非言語的対処(具体的には威嚇動作、怒りと反対する表現の微笑み、感情的表情、回避など)は、言語的対処(具体的には冷静的な説得、感情的にののしること、相手に直接突っ込むことなど)をやや上回っている。「怒り対象を相手にしない」もそれに該当する。

自己指向型は、合計44件(27.5%)である。我慢、自己コントロール、自己鎮静が主であり、被験者の記述には「何もしない」「すごく怒っていて、何もしないほどだ」というのがあり、自己抑制と見なすことができるため、このカテゴリーに入れたわけである。

第三者指向型は、合計22件(13.75%)である。告げ口、通報、および親友・家族に突っ込むことなどがそれである。また、今では、SNSに書き込むことが一般化されつつあることが分かった。

物事指向型は、合計6件(3.75%)である。つまり、怒りをぶつけるのを避けるために、ほかのモノや事に注意を分散することである。例えば、リラックスするために、音楽を聴くことや、怒りを発散させるために、ぬいぐるみをたたくことなどである。

以上みてきたように、在日中国人留学生の怒り経験には日本人の行動様式に起因することが一番多いことや、偏見がそれに次ぐこと、一過性被害がそれほど頻繁ではないこと、公的問題にも言及されたことが調査結果に示されている。また、対処法としては、「身体的攻撃がない」、「攻撃転嫁が少ない」、「嫌味・遠回しがない」といった特徴が見られる。

大淵(1984)は社会人124名と大学生130名に対して、Averillの質問紙を用いた「怒りの経験」調査を行ったうえ、結論を8項目にまとめた。ここで、関連のある部分を取り上げ、対照しながら

検討する。まず、「(1) 怒りの対象のほとんどは人間で、怒りは対人情緒である」が、在日中国人留学生の経験から見ると、それ以外の場面も少なくなく、19件(8.23%)に達している。具体的には、中国人の身分で部屋の賃貸が難しい、手続きが面倒くさい、及び前述した公的問題がそれである。次に、「(3) 怒りの挑発因となった出来事は大部分が欲求不満やプライド損傷など心理的被害で、挑発者の行動が社会規範に反するとの認知判断が被験者の強い怒りを誘発した」と「(5) 被験者の行動は攻撃的と非攻撃的の両面があるが、前者には抑制が伴いやすかった」とほぼ同じような様相を呈している。最後に、「(4) 怒りの動機は単純な仕返しだけでなく、相手の行動や相手と自分の関係を変化させる問題解決的要素が強かった」というが、本調査ではそういった問題解決的要素がほとんど見られず、かえって被験者の記述からなんらかの無力感が読み取られ、多様化している印象を受ける。

また、人間の怒りというのは本能的なものではなくて自己愛が傷つけられた時に、あくまでも二次的なものなのだ(和田, 2010: pp.35) という主張と符合しているものがいくつか挙げられる。例えば、心をコップに喩えた日本アンガーマネジメント協会代表理事の安藤俊介の話である。そのコップの中身が「苦しい、疲れた、寂しい、痛い、虚しい、不安、いやだ、つらい」などで、いわば一次感情そのものである。また、日本の中小学校教育に使われている「怒りの火山=恥ずかしさ、ふがいなさ、寂しさ、心配、いら立ち、残念、不安、悲しみ」も同様である。本調査の結果から見れば、在日中国人留学生の怒りの底には寂しみ、心配、傷つき、恐怖、不安、落胆が潜んでいるのが主である。それらに関する認知のプロセスなどについて検討する余地があると考えられる。

3. おわりに

今回の調査結果に基づき、在日中国人留学生の怒り尺度を作って、4件法で評定を求め、因子分析を行うのを次の段階の課題とする。

日比野ら(2006)の研究結果を表4にまとめておいたが、ここで注目すべきは、今回観察されなかった項目(例えば、嫌み、遠回しなど)と、先

行研究で言及されていない「腹诽(心の中の否定)」である。そこに文化的要素が潜んでいるのではないかと興味深く思われ、研究を深化させる必要がある。

それだけでなく、日比野・湯川(2004)の怒りの鎮静化プロセスの3段階説によると、第1段階は、怒りをますます高めるような肥大化の認知が主に行われている経験直後、第2段階は、怒りの感情が緩和され、冷静に客観的に受け止めるような認知が行われている2~3日後、第3段階は、ほぼ鎮静され、「許し」を重要な目標とする一週間後であるというが、本調査では1段階に見られないはずの経験直後の客観視や、直ちに落ち着いた人もいる一方、自己のための「許し」や、いざとなると何らかのきっかけで怒りを膨らませたと明記した人もいる。その違いはやはり異文化コミュニケーションという特定場面によるものではないかと推測されるが、その原因の究明を含め、さらなる検証が欠かせない。

【参考文献】(アルファベット順)

- 安藤俊介(2016)『自分の「怒り」タイプを知ってコントロールする——はじめての「アンガーマネジメント」実践ブック』Discover
- 遠藤寛子・湯川進太郎(2013)「大学生における怒り喚起の場面と対象——高校生との比較を通じて——」『筑波大学心理学研究』第45号, pp.33-38
- 大淵憲一・小倉左知男(1984)「怒りの経験(1) Averillの質問紙による成人と大学生の調査概況」『犯罪心理学研究』22巻1号, pp.15-35
- 大淵憲一(1986)「質問紙による怒りの反応の研究: 攻撃反応の要因分析を中心に」『実験社会心理学研究』65巻2号, pp.127-136
- 大淵憲一(1987)「成人の怒りの経験における男女差」『大阪教育大学紀要』第IV部門第6巻第1号, pp.25-32
- 日比野桂・吉田富二雄(2006)「怒り経験の鎮静化プロセスと怒りコントロール」『筑波大学心理学研究』31, pp.31-43
- 片田珠美(2015)『怒れない人は損をする』新潮社
- 加賀美常美代・小松翠(2013)「大学コミュニ

- ティにおける多文化共生」(加賀美常美代編)
『多文化共生論——多様性理解のためのヒントとレッスン』明石出版, pp.265-289
- SUN Yi (2011) Personality changes during acculturation adaptation: Chinese International Students in Japan 『人間文化創成科学論叢』第14巻, pp.265-271
- 譚紅艷・今野裕之・渡邊勉 (2009) 「異文化の対人適応における動機づけの影響——中国人留学生を対象に」『対人社会心理学研究』9, pp.101-108
- 寺西光輝 (2017) 「異文化理解教育のための中国人留学生との接触促進の試み」『鹿児島大学リポジトリ』40巻, pp.77-88
- 和田秀樹 (2010) 『「怒り」の正体 精神医学からみた「怒り」の構造とその制御について』basilico
- 謝延瓊 (2014) 「日本語学校における中国人留学生の異文化ストレスと無気力感に関する研究」『九州大学心理学研究』15, pp.53-61
- 湯川進太郎 (2008) 『怒りの心理学——怒りとうまくつきあうための理論と方法』有斐閣